

## 「帆を上げよ、高く」について その4 使われなかった<sup>ことば</sup>詞

尾崎 徹

みなづきみのりの詩によるこの男声合唱曲集が完成した前の年 2013 年に、同じく信長貴富とタッグを組んで作った「葡萄の樹」という混声合唱曲集がある。

その一曲目は『歌を翼に』という詩につけられた曲で「歌を翼にして どこまでも 飛んでいきたい」で始まり、そして「僕らに翼はないけれど 歌なら出来るだろうか」と、希望とともに疑問が投げかけられている。（詩の全文はみなづきみのり氏のブログ「夢見る魚のあぶく」参照）

その翌年に完成したのが「帆を上げよ、高く」である。一曲目『翼よ、お前の空を翔けろ』は先の『歌を翼に』に応えているようにも思える。楽譜の巻末にある詩（P74）を見てみよう。

翼よ お前の空を翔けろ お前の作る光で輝け  
翼よ 風を知れ 時を読め そして 再び空を見上げよ  
全力で 空を翔けろ

『歌の翼に』では疑問や不安の中から生まれる希望が歌われていたが、ここでは言葉が断定的になり命令形に変化している。

そして、詩は全部で10の部分の連から成っている。しかし作曲者は2連、4連、7連、8連の詩を全くつかっていない。

2連 「… お前の海で眠れ 月光を浴び … 思い出に包まれて眠れ」  
4連 「… お前の見つけた木陰で休め … 何も憂うことはないのだ …」  
7連 「… お前を見守り お前の中にいる … 私はお前の空となる …」  
8連 「… 何者も お前に代わる者はない」 など

この使われなかった4つの連の<sup>ことば</sup>詞は、むしろ第二曲「春愁のサーカス」寄りであるかもしれない。福永氏へのオマージュの意も込めたと考えるこれらの連は、第一曲「翼よ、お前の空を翔けろ」のスピード感には馴染まないと捉えたか、作曲者は使用をしなかった。

楽譜の序文に『「翼よ、お前の空を翔けろ」では…中略…詩の内容をメロディにのせて伝えるという発想からは距離を置いており、詩の原文と作曲上のテキスト配置はかなり異なっています』と作曲者が書いているとおり、第一曲では『無窮的な』設計を形作るために余分な連を削ぎ落としたとも取れる。しかし、使われなかった連をもう一度読み返すと、敬愛する恩師の存在という大きな翼に自分は勇気付けられ、それが自分を変えたのだという作詞者の強い思いが、私には見え隠れするのである。

改めて、詩の全文に目を通してみたい。

2018/06/04